

昨秋の衆議院選挙での論点は、「成長と分配」だった。これは、「成長のためには、まず分配を」対「分配のためには、まず成長を」の議論である。そこに「脱成長」の居場所はなかった。SDGs 華やかかなりし今に、一体何故そうなのだろう。

その理由は、自分自身の中にも見出すことが出来る。都会のエコロジー青年であった頃から「めざすは脱成長」、それは私にとってあたり前だった。なぜなら「有限の地球にあって、無限の成長は不可能だから」。そのテーゼ自体を、深く吟味することなく今日まで来た。

結果、目前に次々に現れる現実の問題群と、「脱成長」を結びつける回路が私の中に構築されていない。現実をのりこえる方策の中に、「脱成長」をよく対置できていない。

そんな私の事情は、私個人だけの事情ではないだろう。それゆえに、「脱成長」は荒々しい政治の中に分け入っていく腕力ある言葉となっていない。「脱成長」は同好の者どうしでうなずき合う、詩のようなものにとどまっている。その中に私もいる。詩は現実を克服す

るための必要条件であって、しかし十分条件ではない。

それどころかヘタをすると、漠然とした脱成長志向は、気分としての清貧を経由して、格差や貧困を甘受する下地づくりに寄与してはいないか。

脱成長くあらためて考えねば

く人間のための合理へ その5く

十文字 修

(じゅうもんじ おさむ)

新潟県佐渡島在住

私の暮らす佐渡はここ数年病院の閉院が相次いでいる。この春総合病院がひとつなくなる。数年以内に入院可能な病院がまたひとつ閉じ、ひとつは診療所に縮小する。人口減と高齢化による採算困難と医療人材の不足からである。医療の撤退は地域の衰退の結果であり、そして原因ともなる。当然、経済の活性化、産業の創出が叫ばれる。この現実と「脱成長」は果たしてどう結びつくのだろうか。私自

身の中にその話の筋が描けていない。

その一方で、地方の衰退は「成長」で解決できるのだろうか。そこにもまた疑問がある。佐渡島の島民人口は江戸期から戦前まで、7万人から12万人とゆるやかに増えた。それが減少局面に入ったのは戦後である。人口減と高齢化が進み、人口は今やピーク時の半数以下となっている。高度経済成長やバブルがあっても(あったから?)一貫しての減少である。

人間の領域が自然の領域に対して侵略的、収奪的でない世界。それは当然そうでなければならぬ。でもそうした、分をわきまえた人間社会の領域の枠内にとどまる経済成長というのは、果たしてあり得ないのだろうか。そうかもしれない。そうでないかもしれない。もしあり得ないとすれば、では脱成長の世界にあって個の充実、社会の公正や定常性はどのように可能なのか。その答えを、私(たち)はあらためて、例えば政治の言葉になるほどまでに、説得力ある道筋として描かなければならぬ。